

美術館を柱にエリア一体を活性化

釧路市阿寒町 NPO法人佐々木榮松記念釧路美術館

澄み切った晩秋の青空に鳥が羽を広げている——。釧路市の阿寒湖のそばにある「釧路湿原美術館」はそんなふうにも見える。この美術館には北海道出身の画家・佐々木榮松(ささき えいしょう)の油絵、水彩、デッサンや遺品などを常設展示している。展示室に入ると、正面にこの美術館の名前を決める際のきっかけにもなった「釧路湿原」と題された絵が飾られ、来場者を迎えてくれる。

佐々木氏は、夕陽に染まる釧路湿原を描いた画家として知られており、また、釧路湿原の奥深くまで幻の魚「イトウ」を追い求めるなど釣り師としても有名。道東で釣れる魚やその釣りのポイントなどを詳細に盛り込み、釣りの“バイブル”とも言われる『道東の釣り』や『きたの釣り』などの著者として釣りファンからも熱狂的な支持を受けている。50代からは10年間で世界52カ国を訪れ、釣りをしたり美術館を訪れたことなどを旅行記にまとめるなど文筆家としての顔ももつ。

この美術館は、佐々木氏に寄せられた700件余り約2000万円の寄付金で建てられた。中に入ると、壁には寄付したファンたちの名前が書かれた名札がずらりと並んでいる。

もともとこの美術館は、北緯43度にある国々の絵を集めていた『北緯43度美術館』だった。この美術館が閉館となって売りに出

ていたことや、同美術館オーナーと佐々木氏とは縁があったことなどが同美術館の購入の決め手となった。

■ 大勢のファンがかけつける中、



鳥が羽を広げているようにも見える「釧路湿原美術館」

オープン

佐々木氏の絵を寄贈したのは、運営する「NPO法人佐々木榮松記念釧路美術館」の副理事で副館長を務める高野範子さん。佐々木氏が98歳で亡くなるまで10年間、法定代理人をしながら、高野さんの家族も含めて、佐々木氏の身の回りの世話や介護のほか、個展の企画や開催を代理で行うなどして最期を看取った。

佐々木氏との出会いは1994年(平成6年)4月のこと。現在、同美術館の館長を務めるご主人の英弥さんが、当時校長として釧

路に転勤となり範子さんも釧路住まいに。たまたま範子さんが佐々木作品を収蔵するJR釧路ステーション画廊（以下JR画廊）を訪れ、そこで佐々木氏と話し込むうちに意気投合したことから始まった。

このときの出会いから佐々木氏と血のつながりのない範子さんは実の娘のように佐々木氏の身の回りの世話をすることに。

佐々木氏が亡くなるまで10年間世話ができた理由を尋ねると「生け花の道を志していた私と先生の美に対する感覚すべて含めて感性が一致したことです。また、作品が生まれる瞬間に立ち会えることと、先生が一人でいると生まれてこないものも私と会話することによって生み出してあげられること。例えば、先生が空き箱にデッサンや墨絵をサラッと描いたりするだけで作品になったり、庭を一緒に見ていて一句、歌が生まれたり。こんな幸せなことはないですよ」と笑顔で答えた。

JR画廊が民営化とともに閉館すると、それから3年半は高野ご夫妻が佐々木氏の自宅で作品を保管した。約600点の絵画等の遺贈を受けたため、「このまま作品を家で眠らせておくのはもったいない」と30年来のファンで東京在住の片野良一（理事長）さんや高野夫妻ら17人の有志が美術館の設立委員会を設置。2012年（平成24年）12月にNPO法人の認可があり、翌年の6月15日に美術館をオープンした。

オープン日は雨模様だったが、道内外から佐々木氏のファンなどが大勢来場したという。

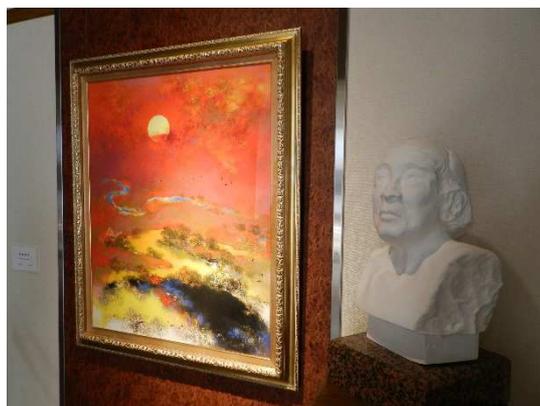
運営は市の事業委託や寄付金、会費、利用

料金などでまかなわれている。また、グッズや絵画の委託販売の収益もあるという。

会員は、正会員が100人、賛助会員250人で国内のみならず、カナダやベトナムなど海外在住の人もいるという。

来場者数は、1年を通して平均月20人前後。ホームページやSNSの「フェイスブック」などを活用し、PRしているため、アジアを中心とした旅行者や学校など団体が来場することも増えてきた。

■ ユニークなエピソードを交えた



「佐々木榮松講座」

美術館がオープンして日は浅いが、ユニークな企画を数多く打ち出していることで注目を集めている。館内は音響も良いことから、音楽イベントが開催され、作品をモチーフにしたウクレレの演奏会や木管五重奏の演奏会なども行われている。

また、範子さんが講師となって佐々木氏の人物像を様々な切り口で分析し、魅力を伝える講座も開催されている。講座は、年4回行

われ、2014年度は、家族のように過ごしたからこそ知ることのできる、佐々木氏の素顔や、油絵や釣りを始めたきっかけ、少年期の才能とその腕白ぶりを、ユニークなエピソードを交えながら紹介した。

筆者が訪ねた10月18日は、第4回目の講座で、「油絵の誕生した秘話」と題してスライドを使いながら、釧路空襲で亡くなった4歳の娘の幻影を題材にした幻想の少女「フローラ」を描いたシリーズ作や湿原をテーマにした作品など佐々木氏の代表作についての芸術論、佐々木氏の画家としての評価などについて熱のこもった口調で語りかけていた。受講者からは「地元に住む者として釧路の夕陽を誇りに思い、自信がつかしました。僕ら市民がその魅力を語っていききたい」「改めて人の心をこんなにも動かす先生の作品や素晴らしいお話を聞くことができ、本当に感動しました」など絶賛するコメントがあり、中には涙ぐむ人もいた。

さらに「みんなでつくろう！アニメーション」と銘打ち、佐々木氏作の童話をもとにしたオリジナルのアニメ「エイショウブラザーズ（予告編）」を制作した。偶然スタッフの中にアニメの制作を経験した人がいたことから実現したという。このアニメの「コマ」となるぬり絵は、市民や全国各地、スペインのイビサ島の住民ら530人の協力でできたもので、試写会はメディアに取り上げられるなど注目を集めた。新たに、このぬり絵を小学生の体験学習として各学校にPRしていきたいという。

理事に旅行会社JTBのアジア局長がいた

ことが縁で、知床など道東を回るツアーのスポットのひとつとして組み込まれ、2014年からは冬の時期のツアーも加わった。

海外からの観光客が増えたことから、副館長による英語ガイドから英語音声によるガイドも導入していくという。



高野範子副館長が佐々木氏の人物像や作品の魅力を伝える講座では、受講者たちが熱心に耳を傾けていた

■ エリア一体で冬の集客を目指す

現在の悩みは、全道一低い気温になることもあるという冬の時期に利用客が大幅に減ってしまうこと。年中無休で営業しているため、暖房費がかかることも悩みの種だ。しかし、この美術館が世界のどこにもないオンリーワンであることの魅力を発揮する季節は、まぎれもなく冬だ。近くには阿寒国際ツルセンターがあり、美術館の窓からは丹頂ツルはもちろん、オジロワシ、大鷲、白鳥など雪原を舞う貴重な鳥たちを間近に見ることができる。筆者が訪れた日も窓越しに、優雅に空を舞う丹頂ツルを見ることができた。

阿寒国際ツルセンターは前の千円札の裏に描かれた絵の元になった写真が撮影された場所として知られ、冬だけでも2万人のカメラマンが訪れる。英国BBC放送局も映像を撮影しにくることもあったという。選びぬかれた絵を鑑賞しながら、希少な動物たちを間近で見ることができる美術館は他にはないだろう。

同センターをはじめ、温泉、レクリエーション施設、道の駅など美術館周辺は見どころが多く、このエリア一体を活性化しようと市や商工会議所などで取り組む「阿寒丹頂の里プロジェクト委員会」も立ち上がり、高野館長はそのプロジェクトの理事も務める。こうした取り組みや地元での冬場のイベントを通して美術館の集客と合わせて地域の魅力発信につなげていきたいという。

さらに、美術館にとって好機が今年やってくる。道東道の本別―白糠―阿寒間が開通するからだ。札幌から4時間程で来ることができるようになり、しかも本別から阿寒間は無料で利用できるため、これを機に道東だけでなく十勝管内や札幌圏など広くPRして集客したい考え。

高野館長は、「私どもの美術館は、演奏会を開いたり、アニメを作ったり、普通の美術館や博物館など公の場所ではなかなか出来ないことが自由にできるところに特徴があります。グッズ販売も飛び込みで『置いてください』と言われれば、『じゃあ置いてみましょうか』とか『演奏させてください』と言われれば『やってみましょう』とか、とにかく楽しくやろうというのがモットー。どこにもないものが

ここにはあるので手作りっぽい、あたたかい美術館になればいいなと思っています」。

佐々木氏は生前、人が多く集う美術館こそ



裸電球の下で絵を描く佐々木氏のアトリエでの色を再現するため、照明にも工夫をこらしている

が自分の作品展示にふさわしい場所と願い、亡くなる10ヵ月前には、改めて作品を見ながら涙を流し、「未来の人に観てもらいたい」と語っていたという。佐々木氏のこうした思いと共に、これまでの美術館の枠を超えた活動が新たな魅力を発信、それを目当てにまた人が来るという好循環が生まれようとしている。

■ 連絡先

〒085-0245

釧路市阿寒町上阿寒 23-38

理事長 片野 良一 (かたの りょういち)
館長 高野 英弥 (たかの ひでや)

TEL : 0154 - 66 - 1117

FAX : 0154 - 66 - 1121

Email : shitugen946A.M@bz04.plala.or.jp

URL : <http://www12.plala.or.jp/kushiro/>